

## 秋間古窯跡群採集瓦に関する基礎的研究

谷川 遼・横山 真・千葉 史

## はじめに

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所では仏教の東方伝播の解明を目的に、寺院の調査を蓄積している。寺院の重要な構成要素の一つに瓦があり、当研究所でも例えば千葉県・龍角寺出土瓦の調査を行なっている（谷川ほか2022・2023）。

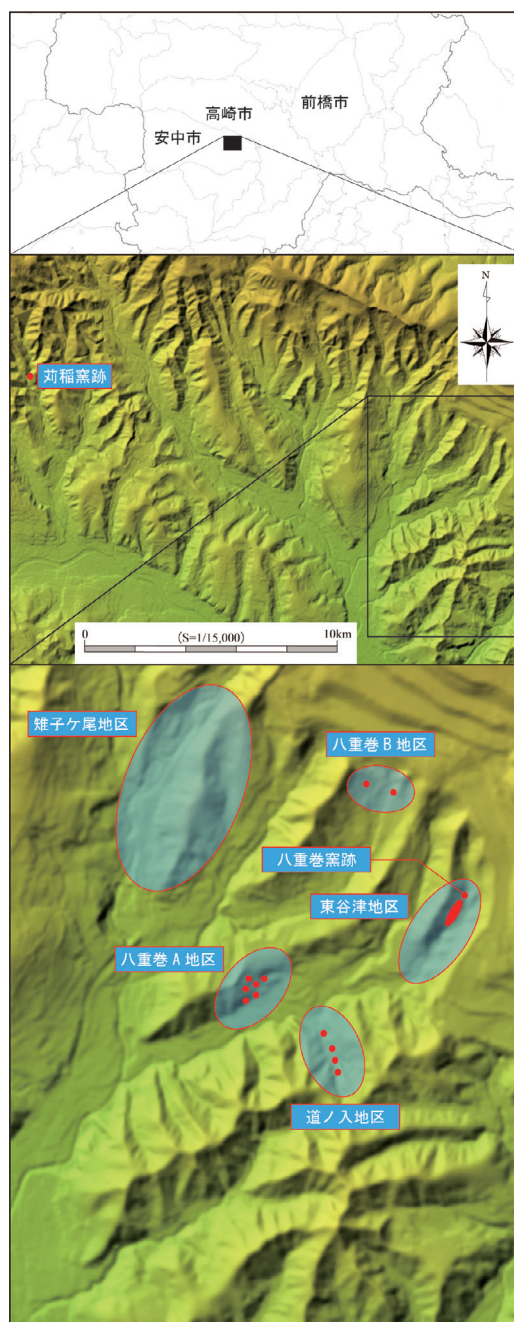
秋間古窯跡群は、群馬県安中市北部の秋間丘陵に広がる群馬県最大級の窯跡群である。本窯跡群は、未確認の窯跡群を含めると約50支群から構成されるともいわれ（安中市学習の森2018）、7世紀頃から須恵器や瓦の生産を開始した。特に瓦は、東国最古級の寺院である群馬県前橋市・山王廃寺や群馬県前橋市・上野国分寺に瓦を供給したことが明らかになっており、古代窯業生産の変遷を辿るためには重要な窯跡群である。

このように重要な窯跡群ではあるが、発掘調査資料が未報告かつ、採集資料の体系的な分類が実施されていないため、本窯跡における瓦生産の実態は不明点が多い。そこで本稿は、安中市が所蔵する秋間窯跡群採集瓦の分類作業を行い、本窯跡群採集瓦の編年的位置付けを試みる。

## 1. 秋間古窯跡群採集瓦の現状と課題

秋間古窯跡群での瓦生産は、安中市小字苧稲と小字八重巻を中心に分布する。特に小字八重巻では多数の窯跡が分布調査で発見されており、総称して「八重巻遺跡」と呼称される。これらの窯跡は、尾根筋や所在地が異なるため、本来は1基ずつ遺跡名称を割り振るべきだが、本稿では八重巻遺跡を便宜的に「東谷津地区」や「八重巻A地区」といったように、近接した窯跡ごとのまとまりで呼称する（第1図）。

本窯跡群の瓦は、田島伊作が畑の耕作中に八重巻A地区で複弁七葉蓮華文軒丸瓦<sup>I</sup>を発見し、これと山王廃寺軒丸瓦との類似性を指摘した（田島1934）ことを嚆矢とする。両者の軒丸瓦は後に、同範関係にあることが明らかになった（住谷1940）。その後、群馬大学の尾崎喜左雄が1957年に八重巻窯跡1基<sup>II</sup>、1965年に苧稲窯跡2基<sup>III</sup>の発掘調査を行ったが（安中市学習の森2018）、調査内容や出土遺物の詳細が明らかでなく様



第1図 秋間古窯跡群の周辺地形

相は不明である。1984年には市道八重巻2号線の工事に伴い窯跡が2基破壊され、大量の瓦が出土した（八重巻B地区）。出土瓦は小林二三雄が回収し、現在は安中市教育委員会が保管する（安中市学習の森2018）が、出土瓦の実態は不明である。

一方、安中市や大江正行を中心とする須恵器研究グループが中心となり本窯跡群の分布調査を断続的に実施しており、道ノ入地区などでの窯跡を確認した成果が『安中市誌』（森田1964）や『安中市史』（飯田2001：pp. 634-637）で報告されている。また、川原嘉久治も個人で踏査を実施し、東谷津地区で計8基の窯跡を確認し、その一部が複弁七葉蓮華文軒丸瓦を生産した窯であること、東谷津地区の谷地帯入り口付近で上野国分寺と同範の軒丸瓦を採集したことを報告した（川原1992）。

栗原和彦は山王廃寺出土瓦を分析する際の比較対象として、安中市が所蔵する本窯跡群採集資料<sup>IV</sup>のうち、田島伊作採集資料（八重巻A地区）に加え、小字八重巻3885-2で採集した資料（八重巻B地区）を中心に118点を報告した（栗原2011：pp. 56-65）。栗原の報告は、山王廃寺出土瓦の産地確定を主眼としたものであったため、本窯跡群の瓦と山王廃寺もしくは上野国分寺出土瓦の具体的な相関性については課題に残している。

以上、簡単ではあるが秋間古窯跡群の瓦に関する現状を概略したように、本窯跡群の瓦の大部分が採集資料と不時発見による資料である。さらに複数人が本窯跡群で採集された瓦を個別に報告したが、いずれも瓦の体系的な位置付けを行ったものではない。そのため、本窯跡群では長期にわたり瓦生産を行ったことは把握できるが、具体的にはどの時期に行ったかについては依然不明瞭である。そこで本稿では、安中市が所蔵する本窯跡群採集資料（一部既出資料を含む）を分類・提示し、窯跡群全体の編年的位置付けを行う。

## 2. 資料の概要と瓦のセット関係

以下では採集された資料を地区ごとに分けて提示する。本稿で提示する資料は、「苅稻窯跡付近」、「八重巻A地区」、「八重巻B地区」である。また、山王廃寺との比較には報告書を適宜参考にした（前橋市教育委員会2007～2012）。

### （1）苅稻窯跡周辺採集資料（第2図）

本資料は、苅稻窯跡所在地の地権者であった石井一郎が安中市に寄贈したものである。加えて資料に「苅稻」の註記が残ることからも、苅稻窯跡付近で採集された資料であろう。本稿では5点を図化した。全て平瓦である。

**平 瓦** 1・2類に分類できる。

1類（1～3）は、粘土板桶巻作りで、凸面を短縄叩きで斜位に叩き締める。凹面には布目痕跡や糸切痕跡、幅2～2.5cm前後の側板痕跡が明瞭に残り、凹面調整は

施さない。側端部は面取するものとし、ないものがある。また1は平瓦片が4個体溶着したもので、凸面に黒灰色の釉が付着する。山王廃寺平瓦ⅠB類と同類型である。

2類（4・5）は、粘土板一枚作りで、凸面を細めの長縄叩きで縦位に叩き締める。凹面は布目痕跡や糸切痕跡が残り、ナデやケズリ調整を施さない。側端部は凹凸面を指ナデで面取する。また、5の凹面にはZ字状の指ナデ痕跡が残るが、記号か文字かは不明である。山王廃寺平瓦ⅡB3類と同類型である。

本稿では図化していないが、栗原報告（2011）では曲線顎で重弧凸部の断面がコ字状の三重弧文軒平瓦（山王廃寺軒平瓦Ⅱ）と、有段部をケズリ出す有段式丸瓦が報告されている（第5図-1・2）。

2023年に安中市・町北遺跡で東山道駅路と官衙遺跡が発掘され、大量の瓦とともに複弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土した（松田2023、安中市文化財課埋蔵文化財係2023）。これらの瓦の中には1～3と同様の短縄叩きの平瓦が出土しており、苅稻窯跡との関係性が注目される。

**瓦のセット関係** 製作技法や焼成、同一窯跡周辺で採集されていることから、平瓦1類と断面コ字状の重弧文軒平瓦、有段式丸瓦はセットになると考えられる。平瓦2類とセットになる瓦は、本窯周辺では採集されていない。

### （2）八重巻A地区採集資料（第3図）

15点を図化した。1～3・8～11・13は註記から田島伊作が八重巻A地区で採集したことが記されているが、4～7・12・14・15には註記がないため採集地は不明である。ただし同一のコンテナにて保管されていたため、田島伊作寄贈資料と考え、八重巻A地区の項で報告する。註記のない資料については胎土分析によって生産地を確定する必要がある。以下は形式ごとに記載する。

**軒丸瓦** 1～3は複弁七葉蓮華文軒丸瓦で山王廃寺軒丸瓦Ⅳ類と同範である。瓦当部と丸瓦部はいずれも接着式によるが、1は接着面にカキヤブリを施している。また、丸瓦部は無加工で接着したものと考えられる。栗原報告では中房径や弁長、色調などから1をⅣB類、2・3をⅣA類とするが、中房径や弁長の差は最大で1cm程度で乾燥・焼成の際の収縮差の可能性が高い。また色調も窯場や使用粘土の差の可能性が高いため、これらが異範である確証はない。ⅣA類とⅣB類が異範かは今後の課題である。

4～7は単弁五葉蓮華文軒丸瓦である。4・5は横置型一本作りで、上野国分寺軒丸瓦B201aと同範である。瓦当裏面はナデ調整の痕跡が残る。また5は弁端から外



区方向へ伸びる範傷が確認できる。6・7は縦置型一本作りで、上野国分寺軒丸瓦B101と同範である。範の表出が悪く、一部は文様が不鮮明である。また、縦置型一本作りの特徴として瓦当裏面に無絞りの布目痕跡、下半には周堤状の突帯が認められる。

B201は上野国分寺の金堂所要瓦であり、最多型式かつ創建期の瓦（Ⅱ-2期）<sup>V</sup>として新田郡笠懸窯跡群の鹿ノ川窯跡で生産され、東毛地区に分布することが指摘される（群馬県教育委員会1988：pp. 152-153・2018：p. 318）。B101はB201を祖型として成立する創建期（Ⅱ-3期）の瓦である。また同範資料が採集されることから生産地は新田郡笠懸窯跡群山際窯跡と考えられている（群馬県教育委員会1988：p. 149）。組み合わせる軒平瓦は、後述の12（上野国分寺P002）である。しかし、これらの資料には註記がなく、確実に秋間古窯跡群で生産されたかには疑問符が残る。

8は内区に右巻きの三巴、外区内縁に珠文、外区内縁と外区外縁を圏線で区画する巴文軒丸瓦である。瓦当裏面と瓦当側面はケズリ調整で平滑に仕上げる。瓦当部と丸瓦部は接合式による。生産年代は鎌倉末～室町初期と推定され、群馬県内で同范例は確認されていない（栗原2011：p. 57）。

本稿では図化していないが、栗原報告（2011）では縦置型一本作りで三重弁七葉蓮華文軒丸瓦（山王廃寺軒丸瓦ⅧA）が報告されている（第5図-3）。

**軒平瓦** 9～11は三重弧文軒平瓦で、山王廃寺軒平瓦ⅡKB型式と同型式である。瓦当部は平瓦部の広端部凸面側（もしくは凹面側）と広端面に粘土を貼り足して成形する。一見すると包み込み式と類似するが、凹凸面に粘土を貼り足さないで包み込み式ではない。重弧の施文は粘土円筒から分割後に行う。凸面は回転横ナデで調整し、凹面には布目痕跡と糸切痕跡、幅2～2.5cm前後の側板痕跡が残る。10・11は凹面瓦当部側に広く横ナデ調整を施す。側面はヘラケズリで、面取調整は行わない。

12は右半分のみ残存する唐草文軒平瓦である。その文様構成から、上野国分寺軒平瓦P002と同範である。凹凸面ともにケズリ調整を施し、側面はヘラケズリで面取調整はしない。P002は上野国分寺で2番目に多く出土する範種で、塔や講堂で多く出土することから創建瓦（Ⅱ-3期）の一つである。生産窯は新田郡笠懸窯跡群山際窯跡で、組み合わせる軒丸瓦は前述の6・7（上野国分寺軒丸瓦B101）である。本資料も註記がないため、秋間古窯跡群で生産された確証はない。

**平瓦** 13は粘土紐桶巻作りで凸面を格子叩きで叩き締める。凹面には布目痕跡が明瞭に残る。また側板圧

痕は側板間の段差がほぼなく、かすかに確認できる程度である側端部の面取は行わない。山王廃寺平瓦ⅠA2類と同類型である。

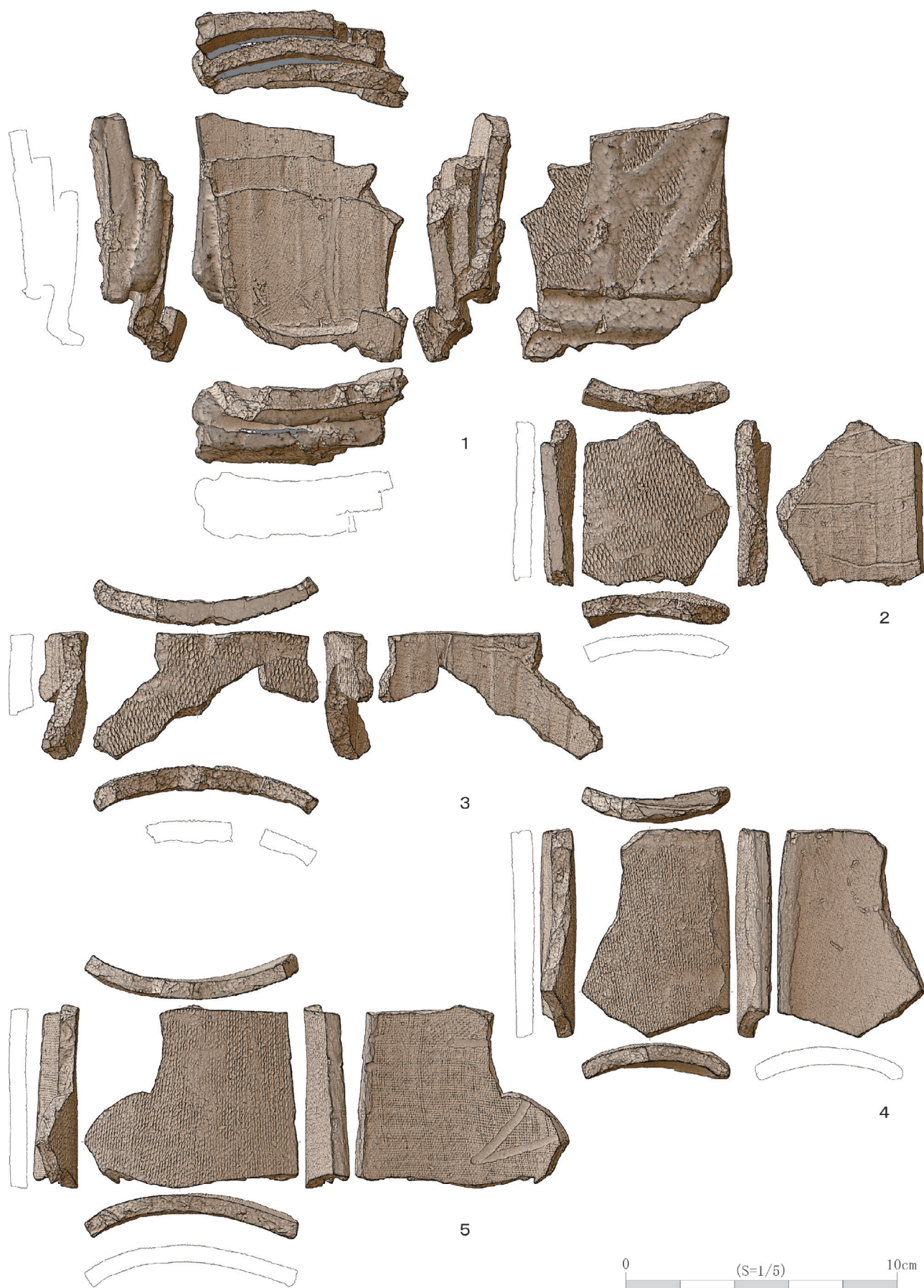
14・15は粘土板一枚作りで凸面はケズリ調整を施す。凹面には布目痕跡と糸切痕跡が残る。また14・15の凸面にはヘラ書きで文字が刻書される。14が「織継」、15が「倉人」で、人名であろうか<sup>VI</sup>。ヘラ書きの人名文字瓦は上野国分寺では8世紀末以降の西毛で生産された補修期の瓦に多く（群馬県教育委員会1988：pp. 242-244）、本資料も同様の時期に生産された可能性がある。ただし、註記がないため本窯跡群で生産された確証はない。

**軒瓦のセット関係** すでに既往研究で言及されているが、複弁七葉蓮華文軒丸瓦（山王廃寺軒丸瓦Ⅳ）は山王廃寺の本格的な伽藍整備期（7世紀第Ⅳ四半期以降）の瓦であり、三重弧文軒平瓦（山王廃寺軒平瓦ⅡK）とセットとなる。ただし三重弧文軒平瓦は、複弁七葉蓮華文軒丸瓦に後出する複弁八葉蓮華文軒丸瓦ともセットとなるほど継続して生産される。また、本稿で報告した三重弧文軒平瓦は粘土円筒から平瓦を分割した後に施文する「分割後施文」であるため、生産年代の上限は697年となる<sup>VII</sup>が、山王廃寺で「分割後施文」以前の技法である「分割前施文」（粘土円筒から平瓦を分割する前に施文する）による軒平瓦の出土の有無が判然としないため、現状では三重弧文軒平瓦を技法的に細分できていない。そのため軒丸瓦と軒平瓦で年代差を多分に含む可能性があるが、便宜的に複弁七葉蓮華文軒丸瓦と分割後施文による三重弧文軒平瓦をセットとする。

単弁五葉蓮華文軒丸瓦はB201aとB101の2範種あり、B201aとセットとなる軒平瓦P001は本稿報告資料に含まれていない。一方、B101とセットとなる軒平瓦はP002で本稿報告資料に含まれている。また、巴文軒丸瓦とセットになる軒平瓦も採集されていない。

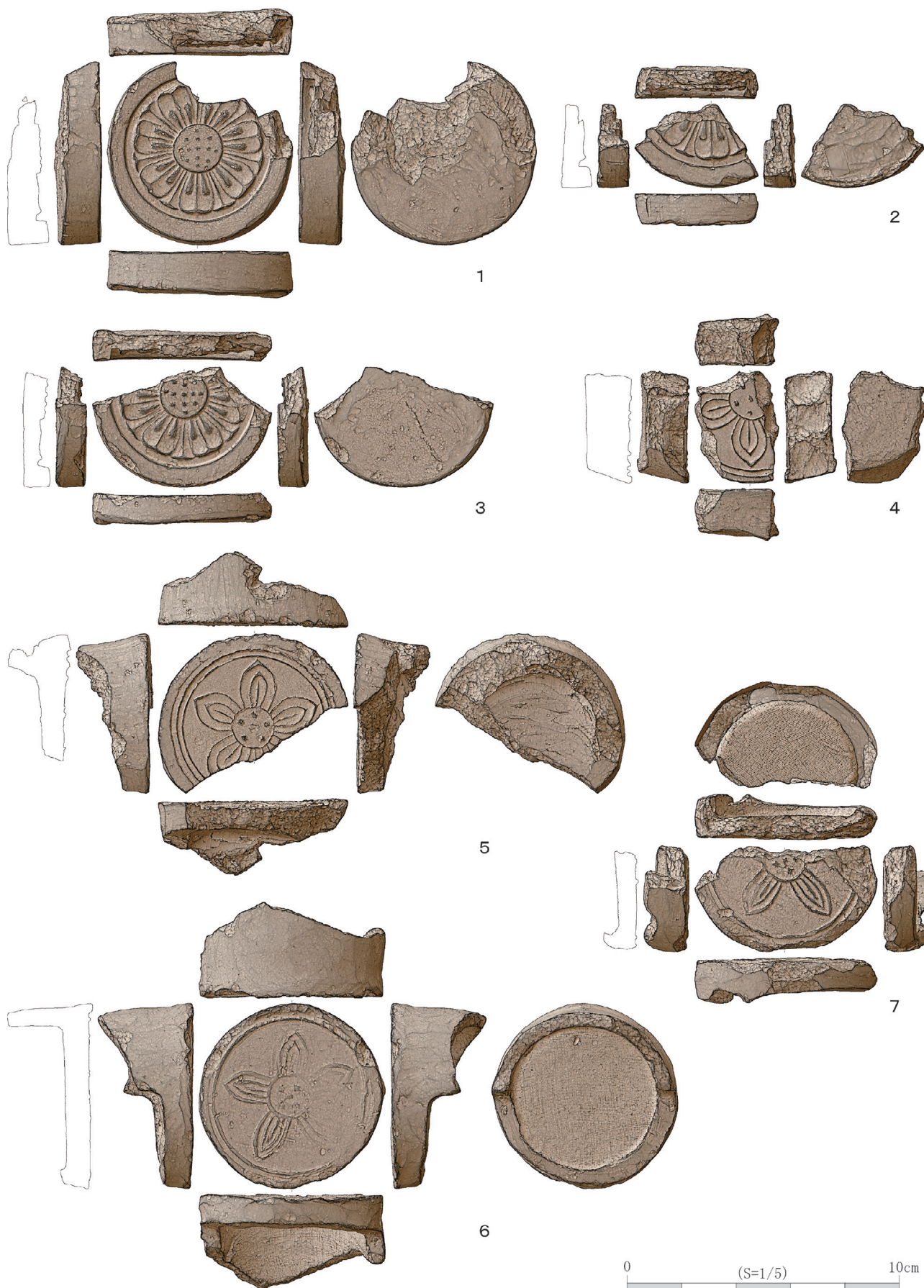
よって八重巻A地区採集軒瓦のセット関係は以下のようになる。

- ・複弁七葉蓮華文軒丸瓦－分割後施文の三重弧文軒平瓦
- ・軒丸瓦B201a－なし
- ・軒丸瓦B101－軒平瓦P002
- ・巴文軒丸瓦－なし



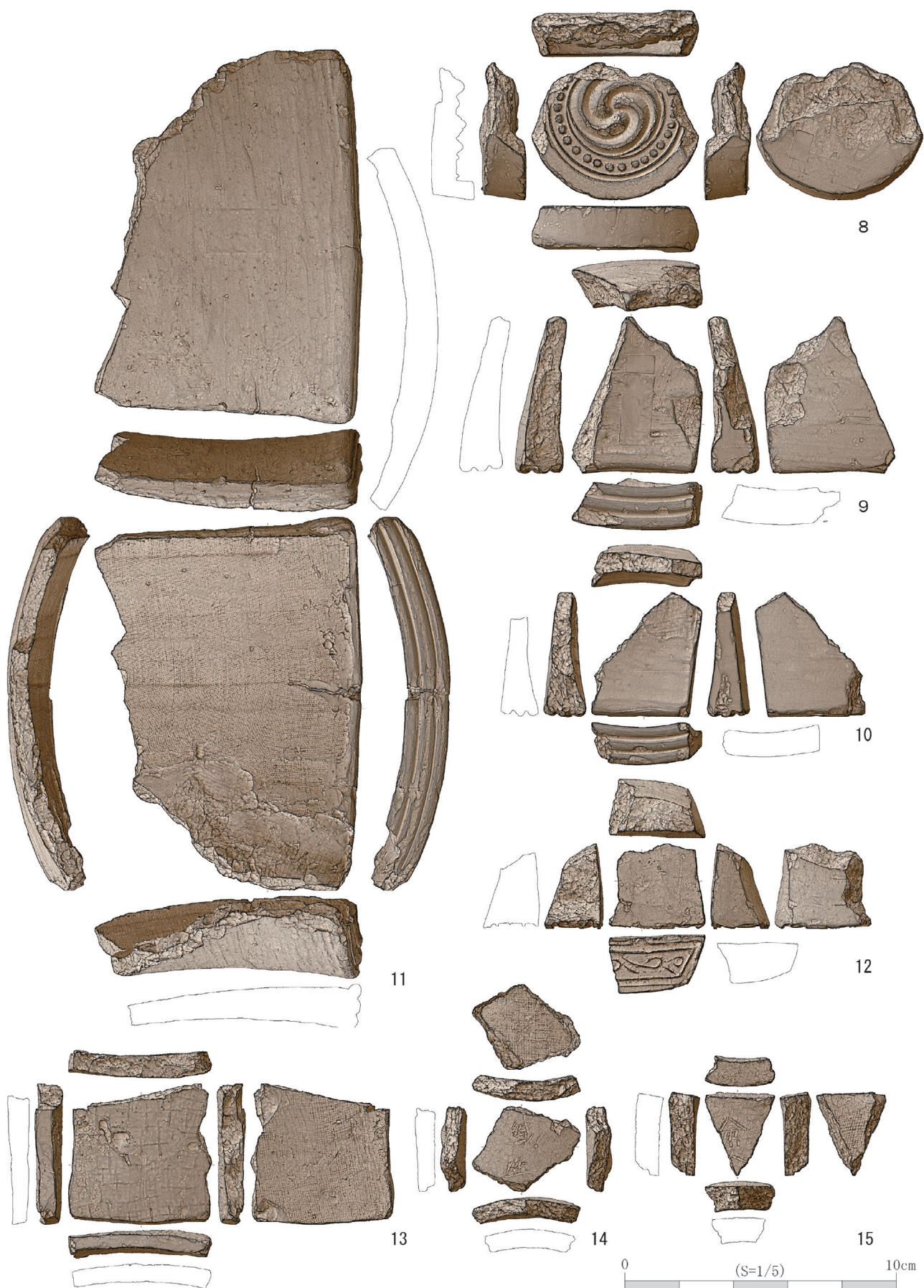
第2図 苅稻窯跡周辺採集資料





第3図 八重巻 A 地区採集資料①





第3図 八重巻 A 地区採集資料②



**(3) 八重巻B地区採集資料 (第4図)**

59点を図化した。1～59は註記で「八」とかかれており、市道八重巻2号線工事中に出土した瓦である。以下は形式ごとに記載する。また、丸・平瓦の類型別数量割合は第1表に示した。

第1表 八重巻B地区丸・平瓦類型別数量割合

		個体数	隅角数	個体数	個体数割合
丸瓦	1類	169	65	16.25	52.0%
	2類	84	20	5	16.0%
	3類	124	40	10	32.0%
	合計	377	125	31.25	100.0%
平瓦	1類	557	94	23.5	25.4%
	2類	832	143	35.75	38.6%
	3類	621	131	32.75	35.4%
	4類	4	2	0.5	0.5%
	合計	2014	370	92.5	100.0%

**軒丸瓦** 八重巻B地区の軒先瓦は1の軒丸瓦のみである。瓦当部は一部のみ残存し圈線が巡るが、瓦範の特定はできない。丸瓦部凸面は縦ケズリを主体に不定方向に調整し、凹面は布目痕跡と糸切痕跡が残る。布目痕跡は瓦当裏面まで連続していることから、縦置型一本作りである。よって本資料の生産年代は上野国分寺創建期のⅡ-2期以降である。丸瓦は後述の2類に分類できる。

**丸瓦** 2～15は丸瓦であり、1～3類に分類できる。ただし、丸瓦は属性が少ないため不十分な分類の可能性がある。

1類(2～7)は、無段式の粘土板一木模骨巻作りで、凸面を縦位縄叩きで叩き締めた後に回転横ナデで調整する。凹面には布目痕跡と糸切痕跡が残る。側端部はヘラケズリで、凹面のみ面取調整する。凹面狭端部は未調整で凹面広端部を横ナデで調整する。焼成は全て軟質である。5の凹面側端部側に撚紐痕跡が残っており、これは分割指標と考えられる。また7の凹面には布筒のよれた痕跡が残る。側面はヘラケズリで凸面側を広く面取調整するものが多い。

2類(8～11)は、無段式の粘土板一木模骨巻作りで、凸面に縦ケズリを主体とした不定方向の調整を施す。凹面は布目痕跡と糸切痕跡が残る、調整は施さない。焼成は硬質で色調が青灰色を呈する資料が多い。11は石が溶着しており、この石は焼成の際の焼き台であった可能性が高い。また、10・11は凸面に平行叩き

痕跡が確認でき、8・9を2a類、10・11を2b類に細分できる可能性もあるが、本稿では同一の類とした。

3類(12～16)は、無段式の粘土板一木模骨巻作りで、凸面に縦ナデ調整を施し、厚さが厚手、焼成はかなり硬質である。凹面には布目痕跡と糸切痕跡が残る、釉が付着する個体も多い。側面はヘラケズリで基本的に凹凸面ともに面取調整を行う。13は2枚の丸瓦が溶着しており、窯跡出土であることを示唆する資料である。

**平瓦** 17～59は平瓦であり、Ⅱ群4類に分類できる。Ⅰ群は桶巻作り、Ⅱ群を一枚作りとする。

Ⅰ1類(17～30)は、粘土板桶巻作りの平瓦である。また、Ⅰ1a類(17～24)とⅠ1b類(25～30)に細分できる。Ⅰ1a類は凸面を回転横ナデにより調整することに対し、Ⅰ1b類は凸面に格子叩きで叩き締めた後に横回転のナデ調整を施す。しかしⅠ1a類とⅠ1b類はこの属性以外は一致するため、細分できない可能性がある。これ以外の属性は以下のとおりである。凹面には布目痕跡と糸切痕跡、幅2～2.5cm程度の側板痕跡が残る。側端部はヘラケズリで面取調整は凹面側のみに施すが、まれに面取しない個体もある。狭端・広端部は凹面を面取する個体が多い。また21のように狭端部側に丸味をつけた調整を施す個体もある。17は凹面に横位に伸びる凹線とU字状に湾曲する凹線が残る。U字状の凹線は26・28でも確認できるため、これらは瓦衣輪鉄もしくは側板連結痕跡の可能性がある。また、斜位に伸びる凹線は布綴痕跡の可能性がある。布綴痕跡はその他に23・30でも確認できる。21は狭端部まで布筒が届いておらず、側板痕跡がそのまま平瓦に転写される。転写した側板痕跡に縦位に細かく伸びる凸線痕跡が残る。これは側板を柂目板で製作したことを示唆する。さらに分割指標が22・23・26・29で確認できる。分割指標は粘土円筒から平瓦を分割する際の指標であるため24個体中4個体に出現することは、分割指標を無視した分割、すなわち平瓦の分割枚数を変化させている可能性が高い。ただし、この事象が時期差なのか供給する建物差かは不明である。山王廃寺平瓦ⅠA1類と同類型である。

Ⅱ1類(31～48)は、粘土板一枚作りで凸面を縦位の長縄叩きで叩き締める。また、半数以上の個体は凸面に離れ砂が付着する。凹面は布目痕跡と糸切痕跡が残る。31・34・37・38のように凹面端部を縦位のケズリで調整することもある。側端部はヘラケズリで凹凸面ともに面取調整を施す個体が多い。狭端・広端部は調整しないものがある一方で、34・35・37・44のように凹面(凸面)側を横ナデするものや、46・47のように凸面に横方向の縄叩きを施す例もある。また、41は側端部、46は広端部に布目痕跡が残ることから、凸形もし

くは凹形成形台の使用、すなわち一枚作りであったことの証左となる。これらと同様の特徴を持つ平瓦が山王廃寺で出土しており、その凸面にはへら書きで「天長八」と刻書されている（前橋市教育委員会2012：p. 18）。このことから2類は天長八年（831）前後に生産されたと推測できる。焼成は丸瓦2類と同様に硬質で青灰色を呈する資料が多い。山王廃寺平瓦ⅡB3類と同類型である。

Ⅱ2類（49～55）は、凸面に縦方向のナデ調整を施すことで平滑に仕上げる。凹面には布目痕跡と糸切痕跡が明瞭に残る。側端部はへラケズリで基本的に面取調整は行わないが、50・54のように凹面を面取することがある。また、50・52・55は側端部に布目痕跡が残る。狭端部・広端部は面取を行わず未調整である。破断面から3枚程度の糸切粘土板を重ねて成形していることが分かる。その他の特徴としては、厚さが厚手である、焼成がかなり硬質で凹凸面に釉が付着する、Ⅰ1類やⅡ1類と比較して曲率が大きいことが挙げられる。山王廃寺平瓦ⅡB1類と同類型であり、山王廃寺では塔の再整備段階に使用されている。これまでⅡB1類は吉井・藤岡窯跡群での生産が想定されていた（前橋市教育委員会2012：p. 50）が、秋間古窯跡群での生産であることが判明した。

Ⅱ3類（56～59）は、粘土紐成形による平瓦である。56～58は凸面に平行叩き痕跡、凹面には布目痕跡と粘土紐痕跡が残る。また、明瞭な側板痕跡が確認できないことと曲率が3類と近似することから一枚作りであろう。さらに丸瓦2類の10・11にも同様の平行叩き痕跡が残ることから、同時期に生産されたものと考えられる。また、同様の平行叩きを残す平瓦は須恵器窯跡である安中市・二反田遺跡でも確認されている（安中市埋蔵文化財発掘調査団1998）。

59は凸面に格子叩き痕跡、凹面に布目痕跡と粘土紐痕跡が残る。凹面に明瞭な側板痕跡は残らないが、これは第3図-13と同様の例とすれば、本資料は粘土紐桶巻作りによる成形である可能性があるが、現状では判断を保留したい。また本資料に残る格子叩きは1類の格子叩きより大型であるため、別の叩き板を用いて叩き締めたことが分かる。

**瓦のセット関係** 丸瓦1類と平瓦Ⅰ1類は胎土や焼成具合は近似するが、丸瓦1類の凸面は〈縄叩き→横回転ナデ〉で、平瓦Ⅰ1類の凸面は〈格子叩き→横回転ナデ〉であり、相違がある。両者に若干の時期差が存在する可能性もあるが、ここではセットと考えたい。丸瓦2類と平瓦Ⅱ1類も焼成と色調が近似することを重視して、ここではセットと考える。丸瓦3類と平瓦Ⅱ2類は

凸面の調整や焼成、色調、瓦の厚さが近似することからセットとなる。平瓦Ⅱ3類のセット関係は不明である。

よって八重巻B地区採集瓦のセット関係は以下のようになる。

- ・丸瓦1類－平瓦Ⅰ1類
- ・軒丸瓦－丸瓦2類－平瓦Ⅱ1類
- ・丸瓦3類－平瓦Ⅱ2類

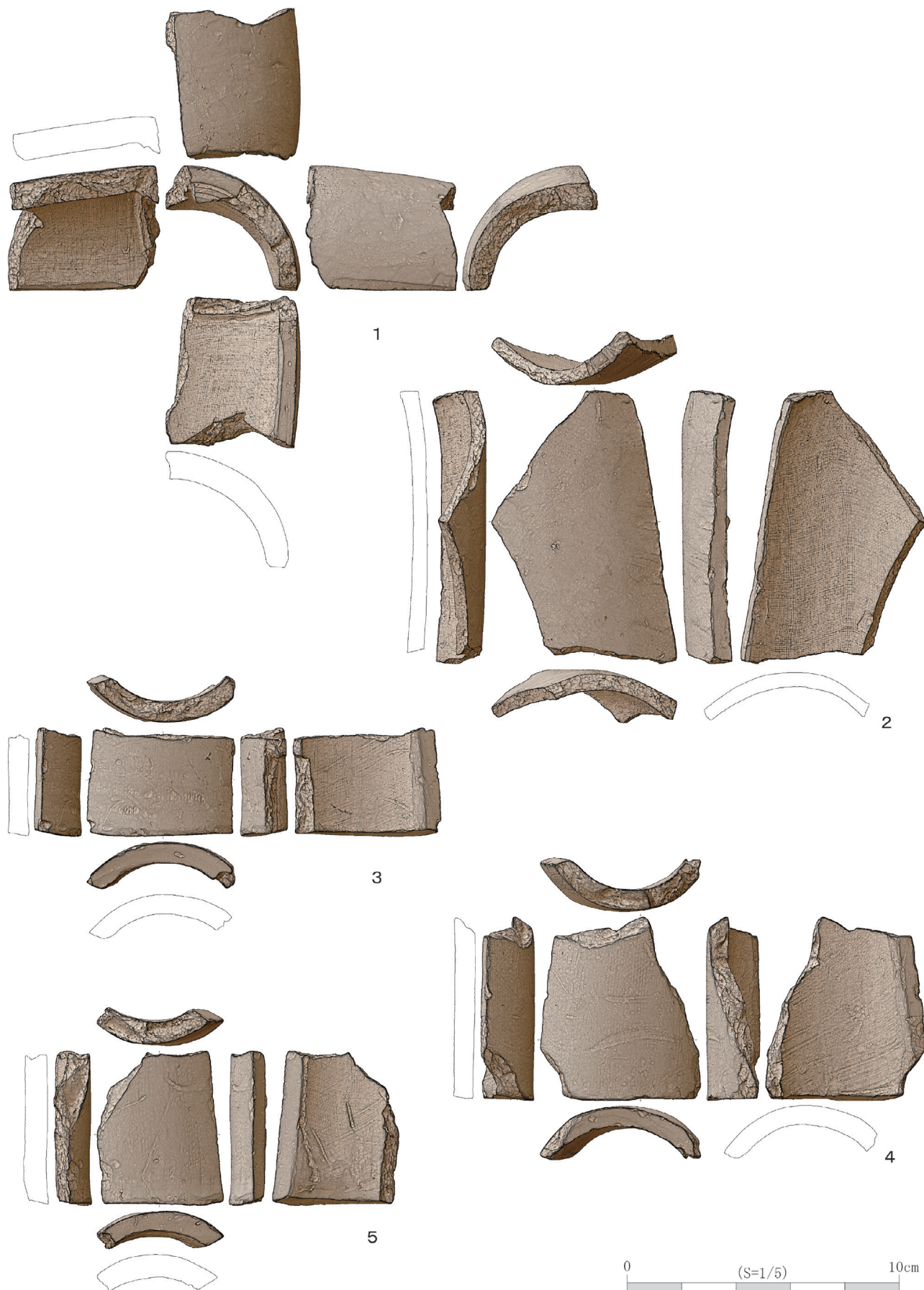
### 3. 秋間古窯跡群で使用された桶状造瓦具

桶状造瓦具（以下、桶）とは側板と呼ぶ細長い木材を連結させ、円筒形もしくは截頭円錐形にしたものである（佐原1972：p. 34）。これに粘土を巻きつけて粘土円筒にしたものを分割することで平瓦ができる。平瓦に残る側板幅のパターンを分析することで桶は復元可能であり、同一桶か別桶であるかも認識できる（谷川2023）。東国ではこれまでに上神主・茂原官衙遺跡や下野薬師寺で使用された桶が分析されており、これらの遺跡では大型桶が2個体、小型桶が1個体使用されていたことが判明している（谷川2023・2024）。さらに、桶の管理主体はいまだ不明であるが、造瓦工人集団と桶は密接な関係があることも明らかになっており（谷川2023・2024）、これに様々な属性を複合することで造瓦工人単位を抽出することができる。

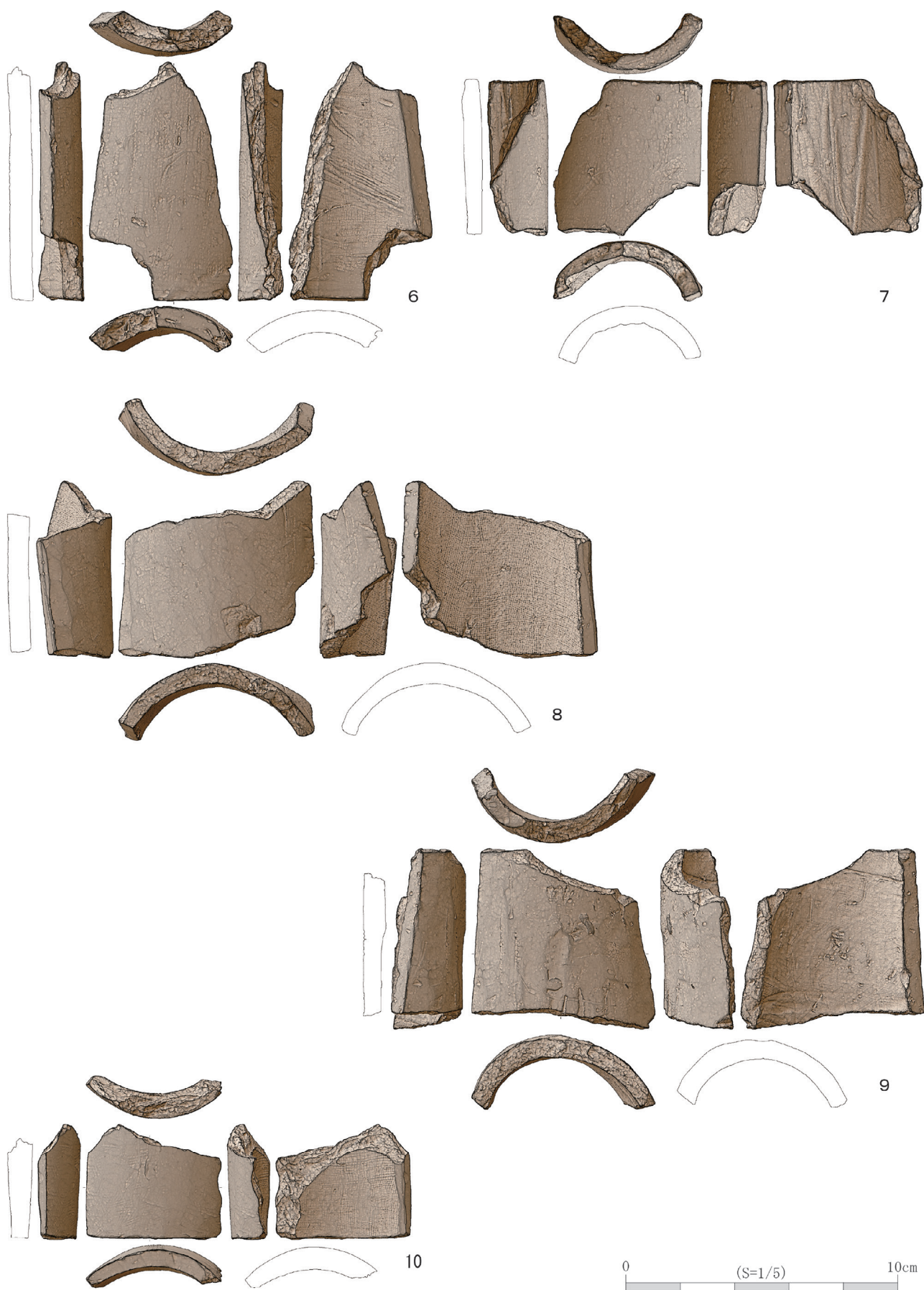
そこで、ここでは秋間古窯跡群で使用された桶の検討を行い、本窯跡群の造瓦工人集団の概要を把握する。今回の検討対象とした資料は、第2図-1～3、第3図-11、第4図-17～30である。分析の結果、凸面を横回転ナデする平瓦（図4-17～30）と凸面を斜位の短縄叩きする平瓦（第2図-1～3）の桶が同一かつ使用する桶は一つであることが判明した。さらに凸面を横回転ナデする軒平瓦（第3図-11）も同一の桶を使用しており、軒平瓦と平瓦で桶の使い分けはない。側板枚数は計52枚で、平瓦の曲率から粘土円筒を4分割することで平瓦を製作している。4分割で平瓦を製作する場合、分割指標は4か所に確認できるが、現状では側板番号3・25・40の3か所しか確認していない。残りの分割指標は側板番号12付近に存在すると考えられるが、これは今後の課題としたい。

側板幅のパターンは第6図に示した。



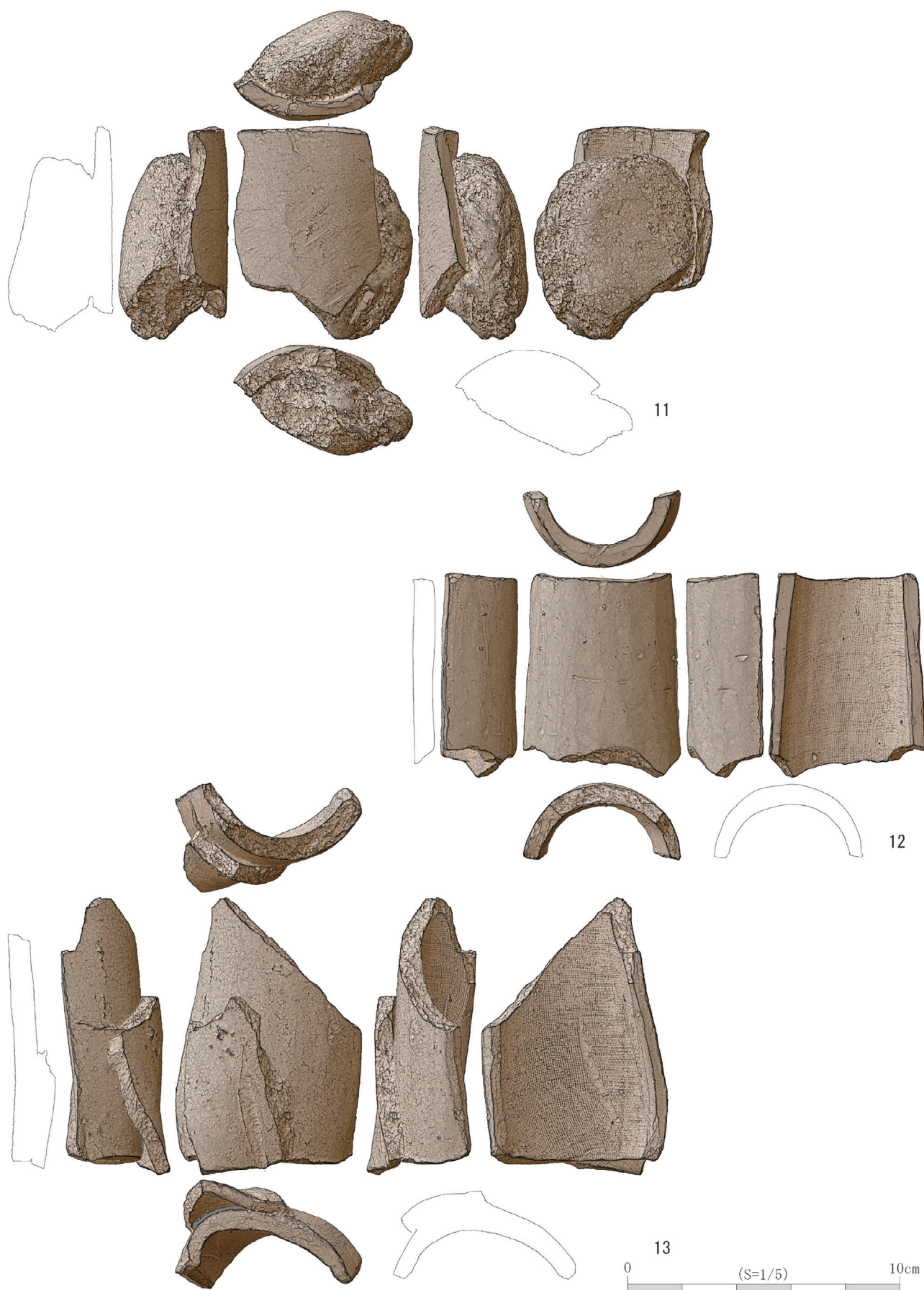


第4図 八重巻B地区採集資料①

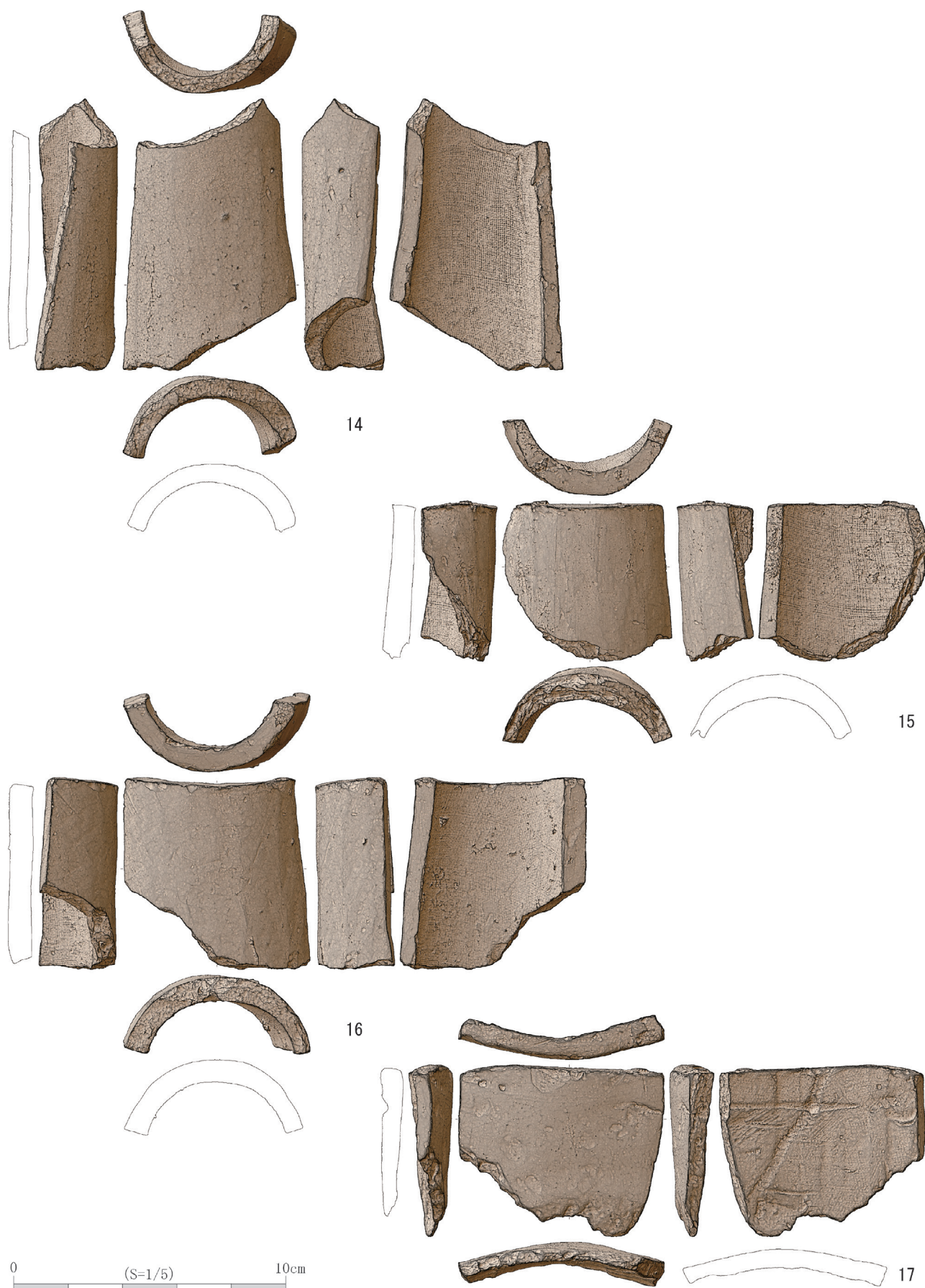


第4図 八重巻B地区採集資料②



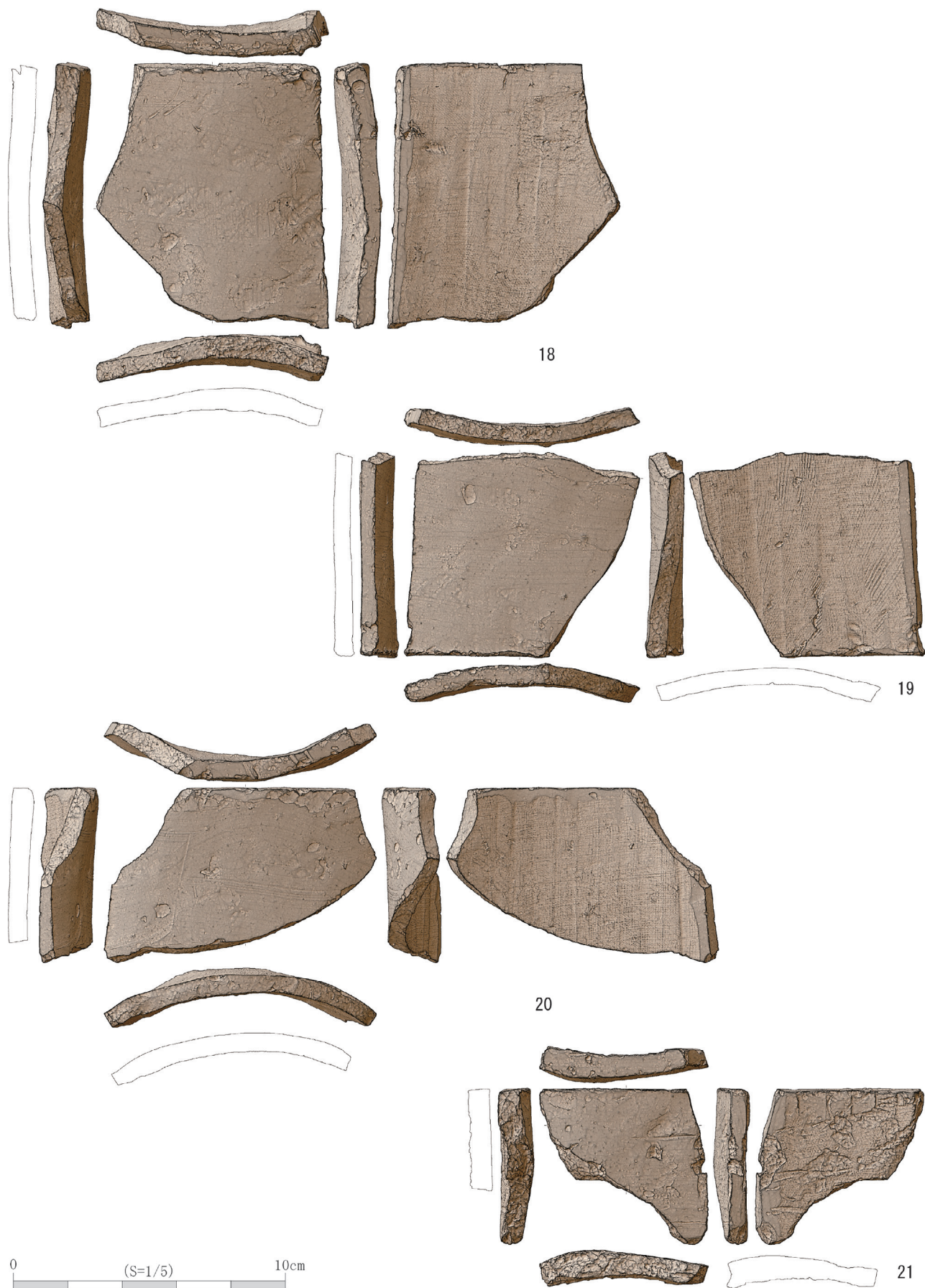


第4図 八重巻 B 地区採集資料③

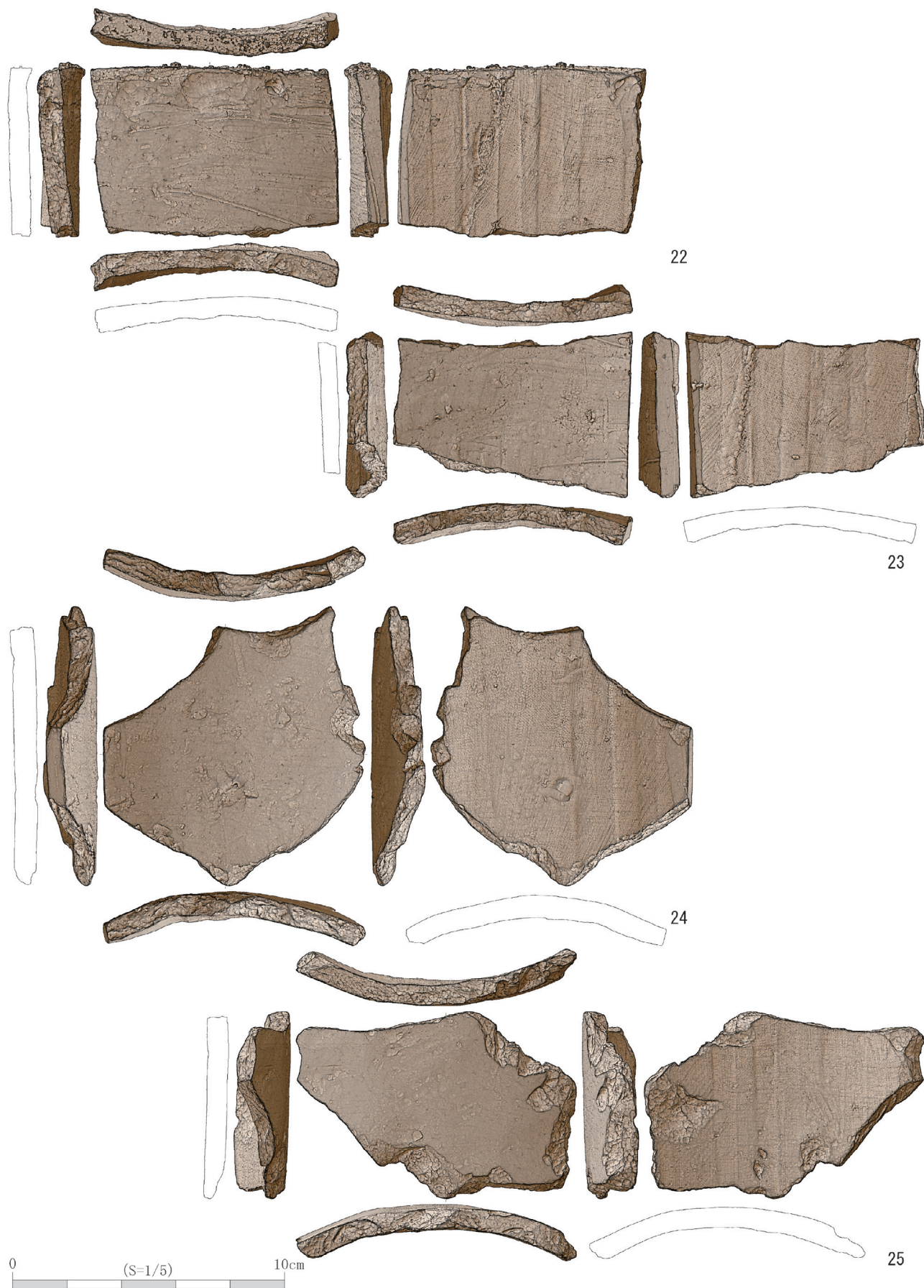


第4図 八重巻B地区採集資料④



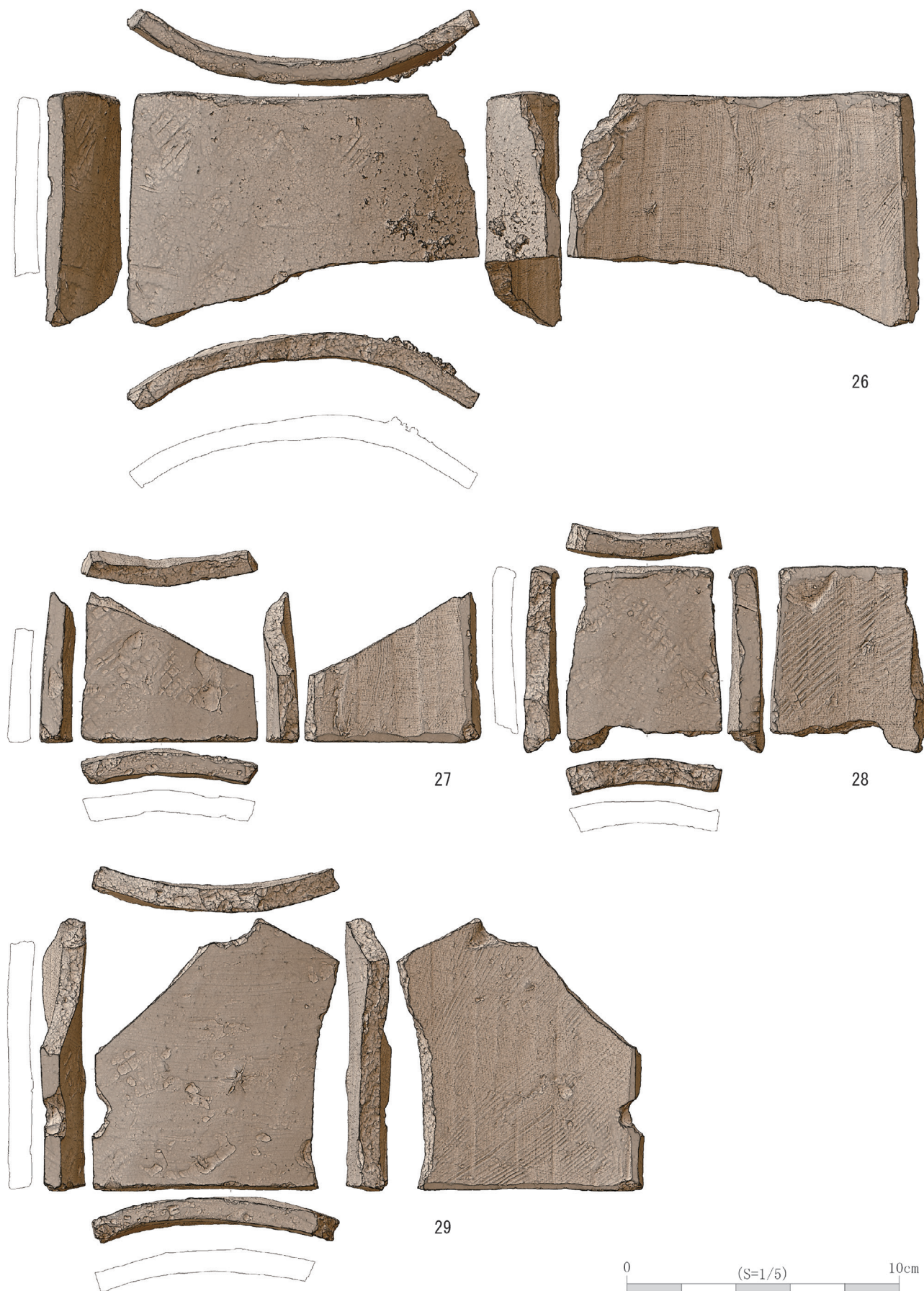


第4図 八重巻B地区採集資料⑤



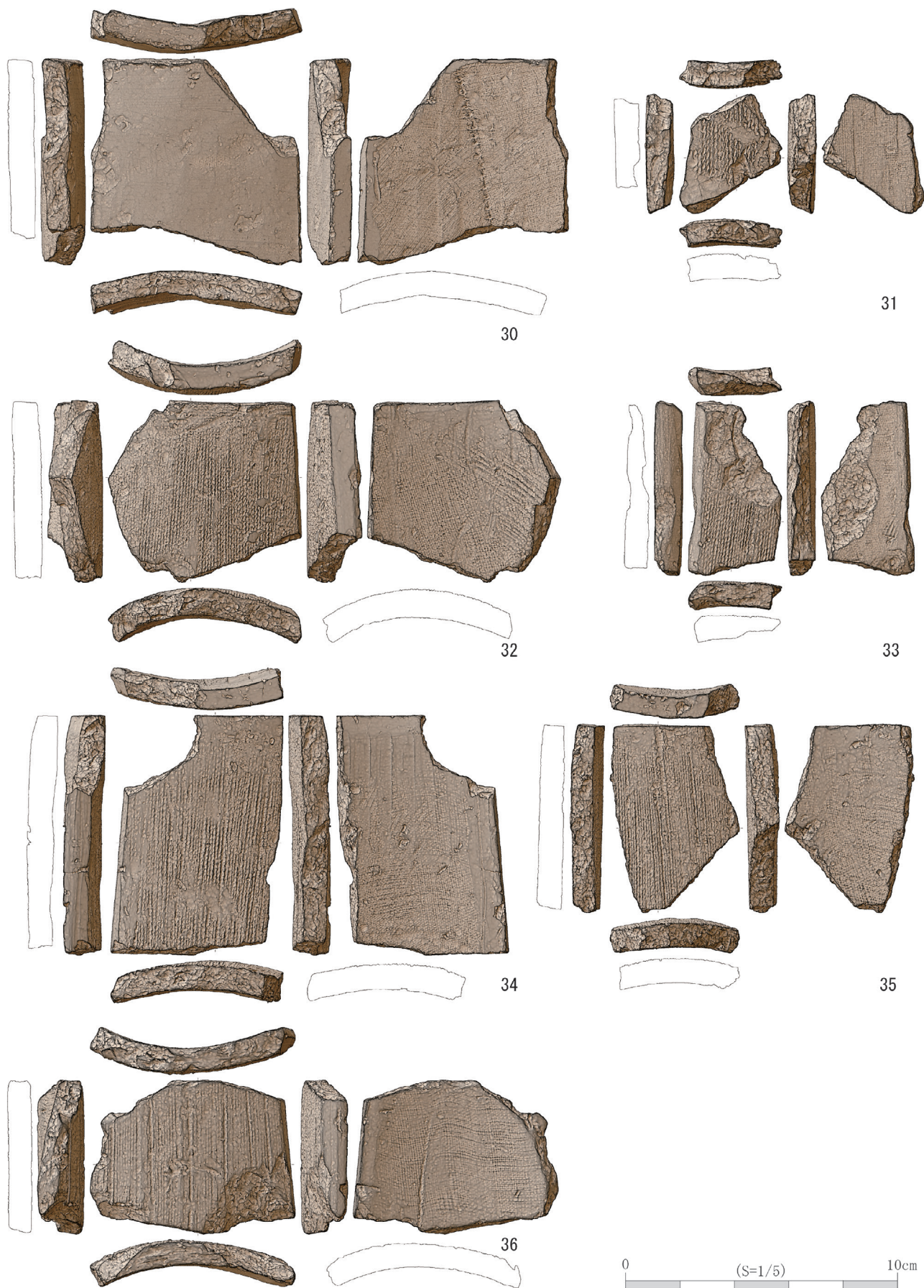
第4図 八重巻B地区採集資料⑥





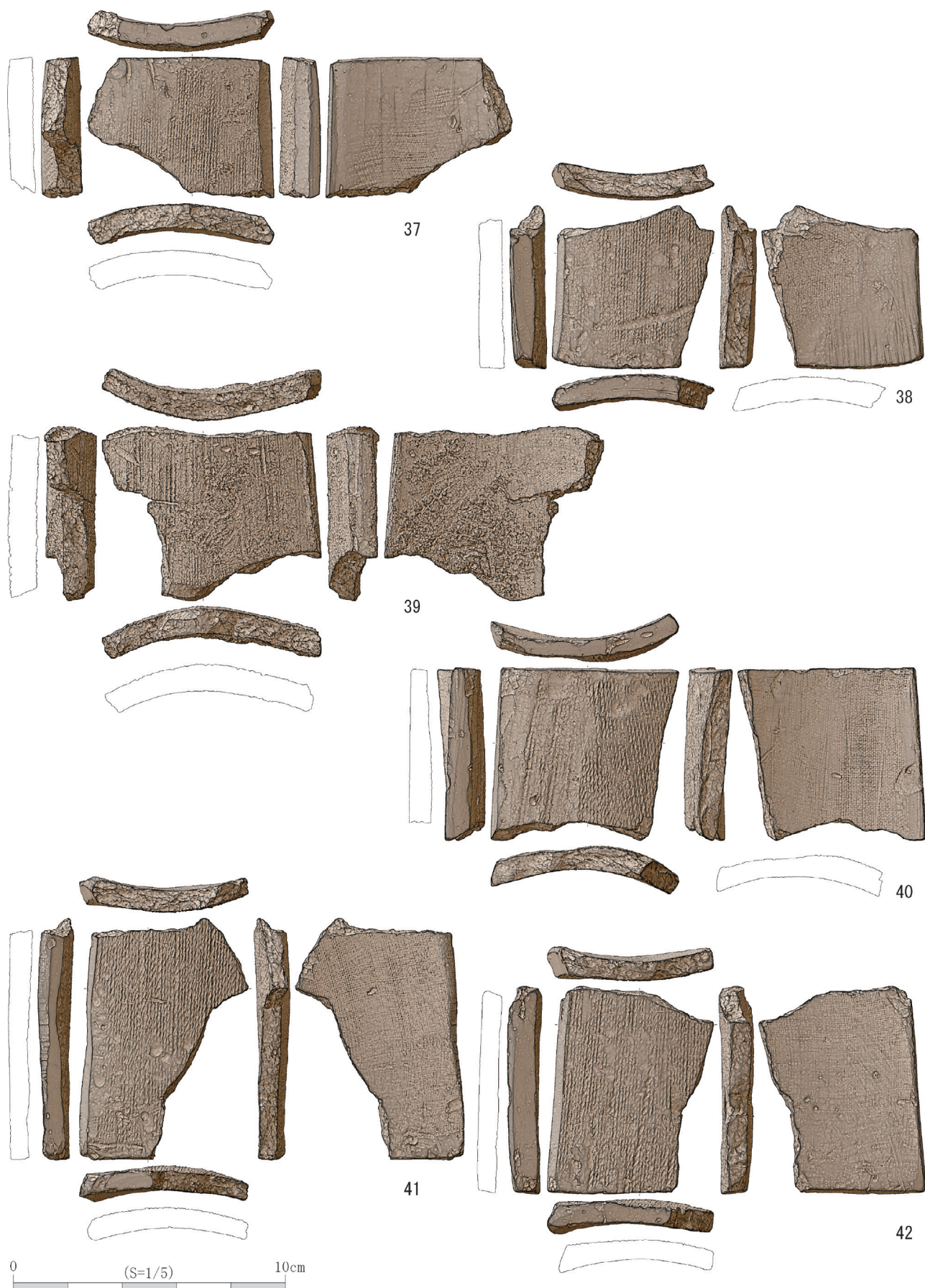
第4図 八重巻B地区採集資料⑦





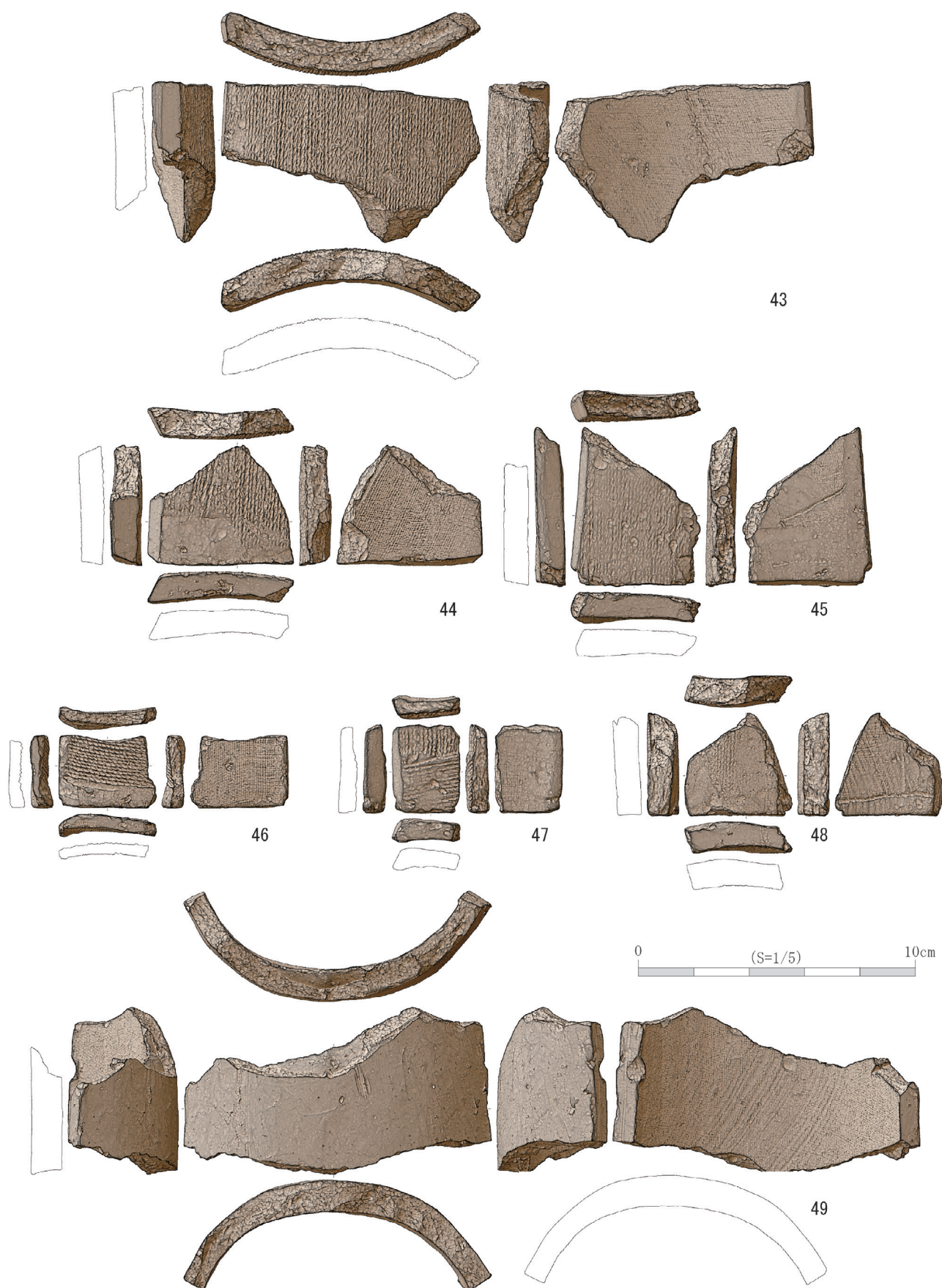
第4図 八重巻B地区採集資料⑧





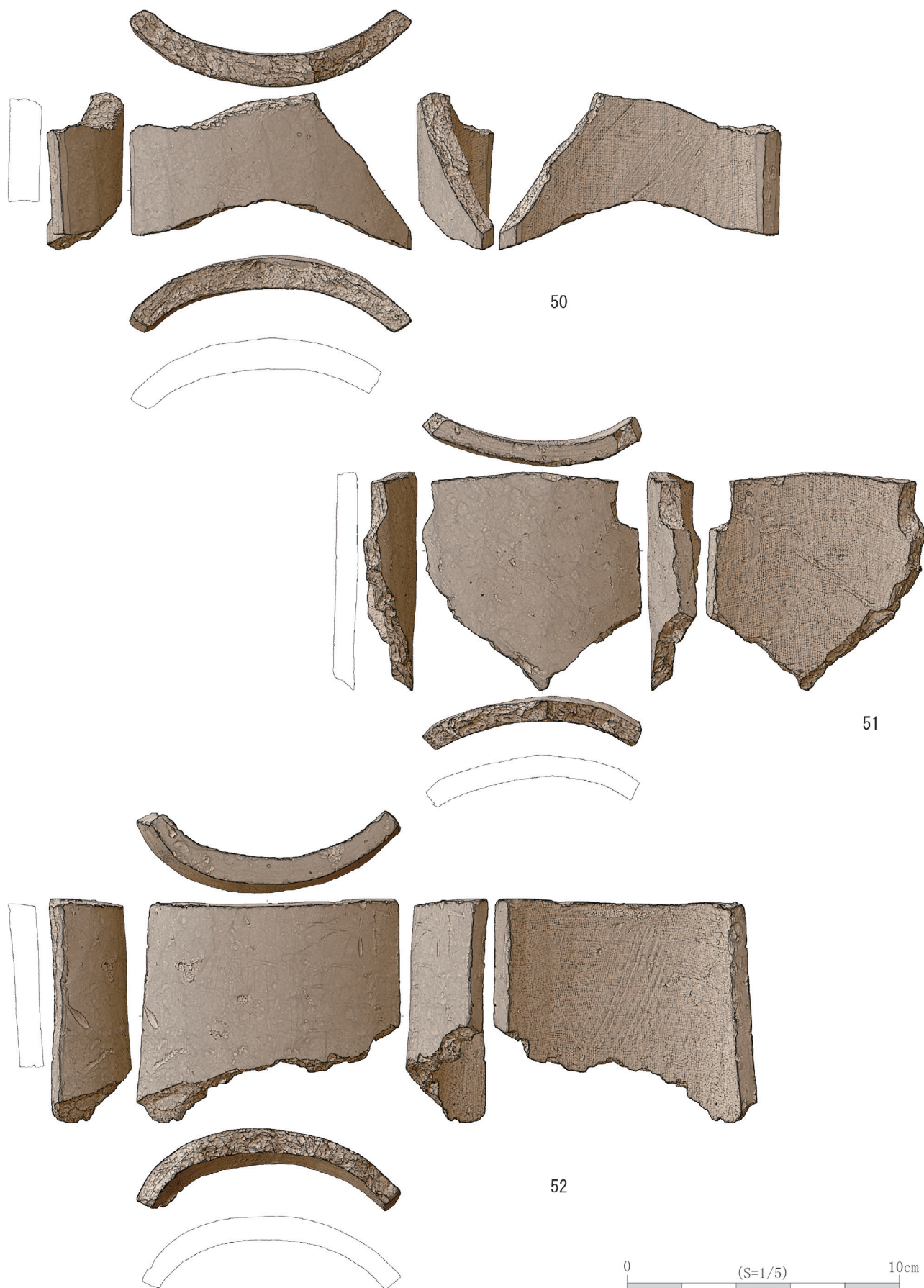
第4図 八重巻B地区採集資料⑨



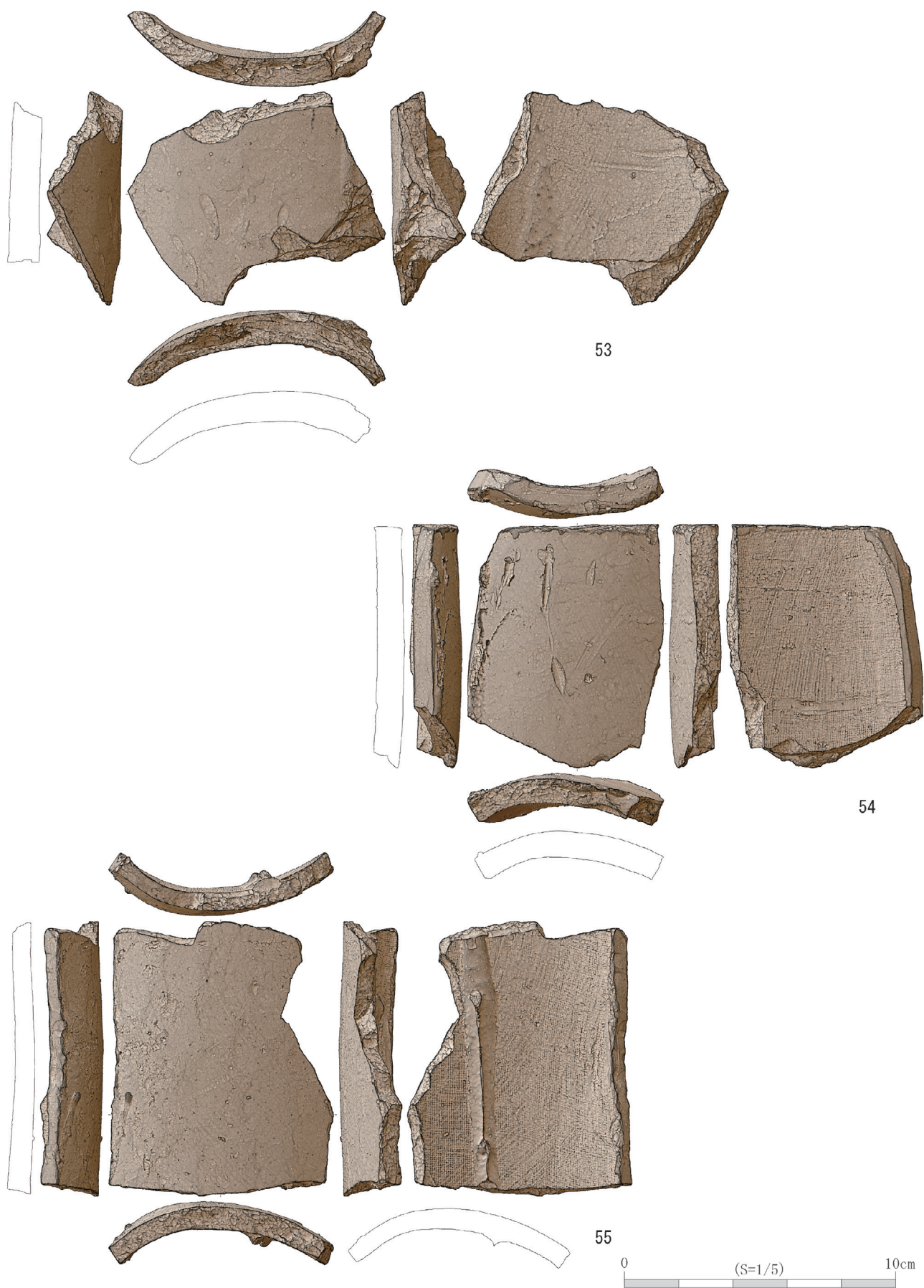


第4図 八重巻B地区採集資料⑩



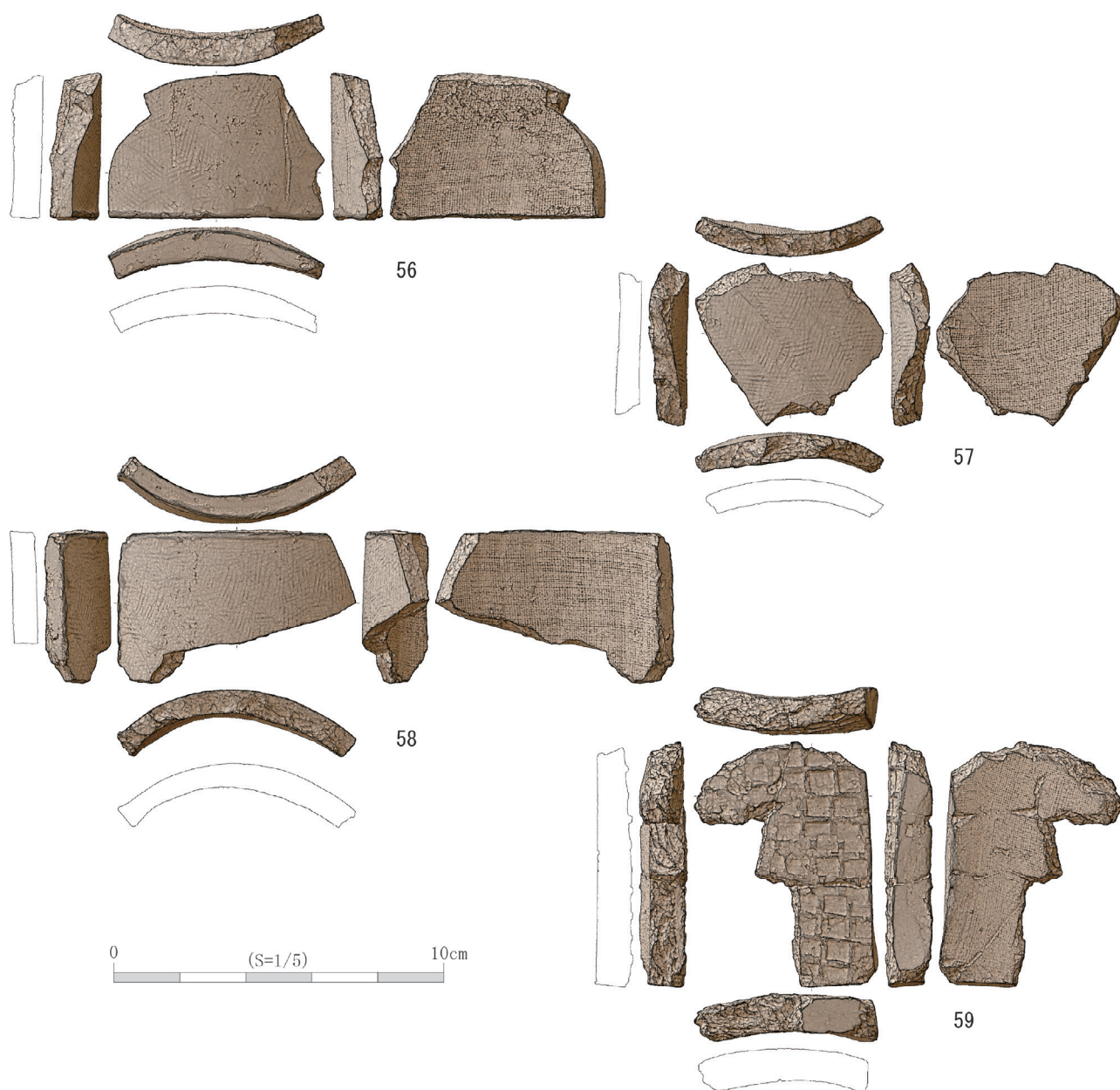


第4図 八重巻B地区採集資料⑪



第4図 八重巻B地区採集資料⑫





第4図 八重巻B地区採集資料⑬

※正射投影図のため、側端部に近いほど曲率が大きくなり、側板幅に誤差が生じている。

※個体ごとに乾燥・焼成時の収縮率が異なるため、ここでは任意で拡大縮小している。

※側板枚数は計 52 枚。

※分割指標は側板番号 3・25・40 で確認できる。

50



#### 4. 秋間古窯跡群採集瓦の編年案

上記のことを踏まえ、ここでは山王廃寺と上野国分寺の年代観を参照しつつ秋間古窯跡群採集瓦の編年案を提示する。編年案は第7図のとおりである。

秋間古窯跡群での瓦生産は山王廃寺創建期の素弁八葉蓮華文軒丸瓦・隆起線八葉蓮華文軒丸瓦・素文軒平瓦の製作を嚆矢にするといわれる（前橋市教育委員会2010：p. 33）。この段階を1期とする。ただし、現在これらの瓦は本窯跡群で発見されていない。

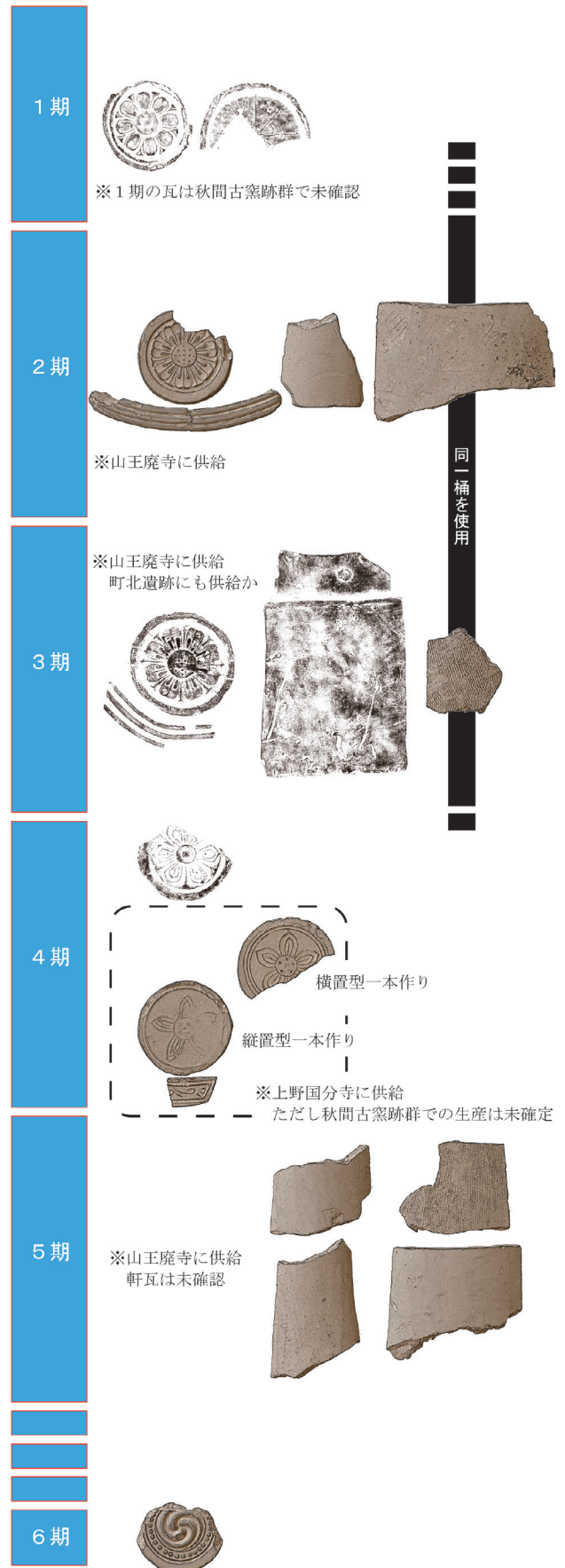
次の段階は山王廃寺伽藍拡充期で、これを2期とする。まず瓦のセット関係を確定する。八重巻B地区（以下、八B）平瓦Ⅰ1類は八重巻A地区（以下、八A）三重弧文軒平瓦と製作技法が共通するため、セットとなる。よって〈八A複弁七葉蓮華文軒丸瓦－八A三重弧文軒平瓦－八B丸瓦1類－八B平瓦Ⅰ1類〉が組み合う。先述のとおり、複弁七葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦は年代差を含むが、7世紀末には確実に生産が開始される。この瓦群は8世紀前半まで生産される。

3期は苅稲窯跡で瓦生産が行われた段階である。平瓦は苅稲平瓦1類、軒平瓦は断面コ字状の三重弧文軒平瓦（第5図-1）、丸瓦は有段式丸瓦（第5図-2）が組む。軒丸瓦は未採集だが、複弁七葉蓮華文軒丸瓦より後出する時期であるため、複弁八葉蓮華文軒丸瓦が組むと考えられる。

苅稲窯跡周辺（以下、苅）の平瓦1類は凸面に斜位の短縄叩きを施すが、これは八B平瓦Ⅰ1類のような従来の製作技法とは大きく異なる。工人集団の変化もしくは外部からの技術導入を考慮する必要がある。ただし、先述のように苅1類と八B平瓦Ⅰ1類で使用する桶は同一であるため、苅1類の生産年代は八B平瓦Ⅰ1類の後、すなわち720年代前後から国分寺創建前後に置く。もちろん苅1類の生産が一過性のもので、八B平瓦Ⅰ1類のような従来の製作技法に再度切り替わる可能性も考えられる。

4期は上野国分寺創建段階である。この段階の瓦としては軒丸瓦B201a、B101、山王廃寺Ⅷ類（三重弁六葉蓮華文軒丸瓦）、軒平瓦P002が採集資料にある。山王廃寺Ⅷ類は八Aで採集されており、山王廃寺へ供給される。その他の資料には註記がないため、秋間古窯跡群で国分寺創建段階に国分寺供給用の瓦を生産したかどうかは今後の調査の進展を待たねばならない。

5期は山王廃寺再整備段階である。山王廃寺出土瓦で、八B〈丸瓦2類－平瓦Ⅱ1類〉、苅平瓦2類と同類型の瓦に「天長八」と刻書された瓦があるため、この瓦群は831年前後に生産された。また八B〈丸瓦3類－平瓦Ⅱ



第7図 秋間古窯跡群採集瓦の編年

2類〉は、山王廃寺の塔再整備の際の整地層や塔瓦積基壇から同類型の瓦が出土している。塔整備の整地層から富壽神寶（初鑄796年）や隆平永寶（初鑄818年）が出土していることから、八B〈丸瓦3類－平瓦Ⅱ2類〉は818年以降の生産と考えられる。そのため八B〈丸瓦2類－平瓦Ⅱ1類〉と八B〈丸瓦3類－平瓦Ⅱ2類〉は近似した時期（9世紀前半）に生産されたと考えたい。これらの瓦群は、弘仁9年（818）に発生した弘仁地震との関係性が重要になる。

秋間古窯跡群における古代瓦生産は、5期以降に規模が小さくなると予想できるが、鎌倉末から室町初期と考えられる巴文軒丸瓦の出土から、当該期にも瓦生産が行われていたと推測できる。この時期を6期とするが、その規模・様相は不明である。

## おわりに

本稿では群馬県最大級の窯跡群であるが、実態が不明瞭であった秋間古窯跡群の瓦についての現状と課題を整理した。また、これまで発表されていなかった瓦を中心に報告・分類を行った。その後、桶の同定作業を行うことで八重巻A・B地区の桶巻作り平瓦と苅稲窯の桶巻作り平瓦が同一の桶を使用したことを明らかにした。また、窯跡ごとの瓦のセット関係を確定していき、最終的には秋間古窯跡群全体で瓦の編年案を提示した。

本稿はあくまでも今後の研究のための基礎作業である。今後は山王廃寺創建段階や上野国分寺創建段階を含めて古代の瓦生産と造瓦工人集団を検討していきたい。

※本稿は2023年度早稲田大学特定課題研究助成費「古代瓦生産における造瓦具の考古学的研究」（課題番号2023C-575）の成果を含む。執筆に際しては、文章執筆および図表作成、三次元計測データの処理を谷川、三次元計測データのPEAKIT処理を横山・千葉が担当した。また本稿作成には下記の方々・機関にお世話になった。記して感謝の意を示す（50音順・敬称略）。

阿部里美・出浦 崇・井上慎也・大橋泰夫・関根史比古・鳥居貴庸・昼間孝志・安中市学習の森ふるさと学習館

## 引用文献

安中市学習の森ふるさと学習館 2018『安中のやきもの 秋間古窯跡群から自性寺焼へ』  
安中市文化財埋蔵文化財係 2023「町北遺跡現地説明会資料」  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 1998  
飯田陽一 2001「第5章 奈良・平安時代 八重巻遺跡」

『安中市史』安中市

出浦 崇 2022「上野国の郡家と寺院～佐位郡を中心として～」『第107回企画展 上野三碑の時代 7・8世紀の郡と東国』群馬県立歴史博物館

川原嘉久治 1992「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要』群馬県埋蔵文化財調査事業団

栗原和彦 2011「Ⅶ 出土瓦」『山王廃寺範囲確認調査報告書Ⅳ』前橋市教育委員会

群馬県教育委員会 1988『史跡上野国分寺跡 発掘調査報告書・本文編』

群馬県教育委員会 2018『史跡上野国分寺跡 第2期発掘調査報告書－総括編－』

住谷 修 1940「山王と秋間の瓦」『上毛及上毛人』上毛郷土史研究会

高井佳弘 2003「上野国分寺の創建」『日本律令制の展開』吉川弘文館

田島伊作 1934「碓氷郡秋間村の古瓦発見記」『上毛及上毛人』上毛郷土史研究会

谷川 遼 2023「上神主・茂原官衙遺跡出土瓦の検討－造瓦工人単位の抽出と人名文字瓦の分析－」『史観』188 早稲田大学史学会

谷川 遼 2024「下野薬師寺創建期における造瓦集団の動向」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』25 早稲田大学會津八一記念博物館

谷川 遼・高橋 亘・宮崎滯菜・横山 真・千葉 史 2022「會津八一記念博物館所蔵の下総龍角寺瓦－三次元計測を用いた瓦の資料報告（1）－」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』23 早稲田大学會津八一記念博物館

谷川 遼・高橋 亘・横山 真・千葉 史 2023「會津八一記念博物館所蔵の下総龍角寺瓦－三次元計測を用いた瓦の資料報告（2）－」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』24 早稲田大学會津八一記念博物館  
前橋市教育委員会 2007～2012『山王廃寺範囲内容確認調査報告書』1～V

松田 猛 2023「複弁蓮華文軒丸瓦の系譜」『ぐんま地域文化』61 群馬地域文化振興会

森田秀策 1964「（3）八重巻遺跡」『安中市誌』

## 図版出典一覧

第1図 ArcGISで谷川作成。

第2～4・6図 横山・千葉が作成したPEAKIT画像から谷川作成。

第5図 栗原（2011）図28・29から転載。

第7図 横山・千葉が作成したPEAKIT画像と前橋市教育委員会（2007～2012）から谷川作成。



## 註

I 本軒丸瓦は、今日では山王廃寺系複弁蓮華文の祖型として認識され、西毛地区を中心に後出型式が分布する。さらに、陸奥国南部沿岸域（夏井廃寺、黒木田遺跡など）でも山王廃寺系と同一文様系譜の軒丸瓦が採用されている（出浦 2022）。

II 長軸約 5 m、傾斜約 30 度の窖窯。

III 4 基確認のうち 2 基を調査。1 号窯は無段の地下式窖窯で瓦窯、2 号窯は 8 世紀末から 9 世紀の須恵器窯。

IV 本資料は、田島伊作が安中市に寄贈したものである。

V 上野国分寺の瓦生産は、在地系瓦（郡系瓦）が主体となる II - 1 期、少数の郡が少品種で大量生産する II - 2 期、多数の郡が多品種を少量生産する II - 3 期に分けられる（高井 2003）。B201 は II - 2 期、B101 と P002 は II - 3 期の瓦となる。

VI 正確に釈読できているわけではないが、本稿では暫定案を提示した。今後の研究によって正確に釈読されるであろう。

VII 分割後施文は、山田寺出土の重弧文軒平瓦の分析から文武朝の補修瓦である軒平瓦 C II 型式以降（697 年）の技法とされる（花谷 2002）。ただし山田寺の重弧文軒平瓦は平瓦部に顎部を張り付けて段顎にする技法であるため、山王廃寺の重弧文軒平瓦とは技法系譜が異なる。そのため山田寺の年代を山王廃寺に援用することには慎重になるべきだが、本稿では仮説として本年代を援用した。